

第2回日本社会関係学会賞の選考結果について

2024年3月

日本社会関係学会

日本社会関係学会では、このたび第2回日本社会関係学会賞として、2022年および2023年に刊行（または学位授与）された出版物と博士論文を対象に公募を行ったところ、10点（博士学位論文1点を含む）の応募があった。日本社会関係学会賞選考委員会は、厳正な審査により、以下の通り最優秀賞1点、優秀賞2点、特別賞2点を決定した。

第1回日本社会関係学会賞受賞作品

最優秀賞 1点

辻岳史著『コミュニティ・ガバナンスと災害復興：東日本大震災・津波被災地域の復興誌』晃洋書房
(2023年2月刊行)

優秀賞 2点

日下部元雄著『若者の貧困を拡大する5つのリスク：その原因と対応策』晃洋書房(2023年3月刊行)
荻野亮吾著『地域社会のつくり方：社会関係資本の醸成に向けた教育学からのアプローチ』勁草書房
(2022年1月刊行)

特別賞 2点

近藤克則著『健康格差社会：何が心と健康を蝕むのか（第2版）』医学書院(2022年6月刊行)
藤山英樹著『ゲーム理論からの社会ネットワーク分析』オーム社(2023年10月刊行)

日本社会関係学会賞選考委員会

委員長：田中敬文（東京学芸大学）・委員：金谷信子（広島市立大学）・佐藤嘉倫（京都先端科学大学）
樽見弘紀（北海学園大学）・辻中豊（東洋学園大学）・露口健司（愛媛大学）・原田博夫（専修大学）
柳原透（拓殖大学）・山内直人（日本公共政策研究機構）

第2回日本社会関係学会賞・講評

日本社会関係学会賞選考委員会

委員長 田中 敬文

第2回日本社会関係学会賞の各賞を受賞された皆様、まことにおめでとうございます。今回、応募点数は前回より減少したが、受賞した各書はいずれも力作で、僅差で各賞が決まった。最優秀賞、それに次ぐ優秀賞のほか、今回から優れた一般書や教科書を対象とした特別賞を新設して2点に授与した。

最優秀賞に輝いた辻岳史著『コミュニティ・ガバナンスと災害復興：東日本大震災・津波被災地域の復興誌』は、なぜ災害復興の早さが地域によって異なるのか、その理由を、災害前から被災地域が築きあげてきたNPO等様々な集団・社会組織による連携・協働の体制にあることを明らかにした。東

日本大震災における宮城県の津波被災地域(女川町、東松島市、名取市)のフィールドワークを通じて、地域コミュニティにおけるガバナンスが災害復興に果たす役割を解明した。アルドリッチの災害復興要因を批判的に検討し、災害復興の従属変数としての「復興政策のパフォーマンス」を「復興計画・政治決定の早さ」「コンフリクトの発生程度」により、独立変数としてコミュニティ・レベルの「ガバナンスの質」により評価した。本書から、地域ごとの復興の多様性が、前災害期におけるコミュニティ構造に端を発して、災害発生以降の被災地域で形成されるコミュニティ・ガバナンスの構造に規定されることが示唆される。まさに、災害対策は災害前からのコミュニティ構築が必要なのである。

優秀賞の日下部元雄著『若者の貧困を拡大する5つのリスク：その原因と対応策』は、若者の貧困を予防する上で、地域のつながりが重要である点を、大規模パネルデータを用いて解明した。若者の貧困リスクを軽減する要因として、親の教育熱心さ、祖父との同居、大学卒、地域の絆（ソーシャル・キャピタル）、正規雇用を抽出している。地域の絆の具体的要素は、親類・隣人の支援、近所助け合い、ボランティア活動であり、ネット友人の存在が貧困を高める効果があるという指摘も興味深い。本書は、社会的排除の視点からの多面にわたる現状把握と要因間連鎖分析として、「社会関係」研究の方法に重要な革新をもたらし、その成果の実装により当該地域でのエビデンスに基づく問題解決への新たな方途を示している。

同じく**優秀賞の荻野亮吾著『地域社会のつくり方：社会関係資本の醸成に向けた教育学からのアプローチ』**は、社会関係資本の醸成に向けてNPO等の中間集団を社会関係資本の醸成要因として重視する。地域社会のつくり方のポイントを、地域社会における人間関係作りの基礎として、「関係基盤」（地域の様々な中間集団）の創出を進めること、「関係基盤」同士のつながりを紡ぐこと、社会関係資本の醸成に向けて時間軸を意識したアプローチを行うこと、社会教育が地域関係資本の醸成に果たす役割を有効に活用すること、の4点にまとめた。文献を丹念に渉猟し、飯田市や佐伯市での調査も活用しており、公民館や社会教育主事の適正配置等に拘る社会教育学への的確な批判と、社会関係資本研究への動態的視点の導入など、既存学問への示唆にも富む。

特別賞の近藤克則著『健康格差社会：何が心と健康を蝕むのか（第2版）』は、この分野の開拓者・第一人者による研究成果・解説の書である。本書は、研究の動因としての問題の重大さへの強い懸念（「いのちの格差」という表現も用いられる）と、現実認識と分析そして提言における科学としての貢献の追求、という2つの姿勢に貫かれ、体系立った構成と読みやすい文章で高い説得力を持つ。基本をなす見解は、「格差社会が比較弱者の心を蝕みその結果として健康を弱める」というものであり、その状況に対処する上で生物学を基礎とする医療モデルから社会疫学を基礎とする「生物・心理・社会モデル」へのパラダイム転換が唱えられ、新パラダイムでは「社会関係」がその中心に位置付けられている。

同じく**特別賞の藤山英樹著『ゲーム理論からの社会ネットワーク分析』**は、社会ネットワーク分析に関する優れたテキストである。社会ネットワーク形成の本質をゲーム理論によって説明しており、教科書であると同時にすぐれた研究書ともなっている。また、統計分析ソフトRを活用することにより、大学学部や大学院の授業で受講者の理解を助けるアイデアを提供している。非常に精密な議論の積み重ねによって、社会ネットワーク分析の本質を深いレベルで読者に理解してもらおうという熱意が感じられ、ゲーム理論と社会ネットワーク論をソーシャル・キャピタルの視点を経て、統合しようという狙いがある。